

先進地視察報告書

水産業改良普及員 金城 宏

- I, 視察課題 A: レンコかご網漁業
 B: 撤餌(かぶし)つり漁業
- II, 場所 長崎県野母崎町漁業協同組合
- III, 日程 昭和58年6月15日～昭和58年6月18日

IV, 目的 本県のつり漁業のうち大きな比重を占める底魚つり漁業においては、………近年、漁船の大型化、漁船船質の強化プラスチック(F, R, P)化が進み、科学装備、省力機器等の設置、漁具・漁法のめざましい発展によって必然的にソネ資源も減少傾向にあり、操業日数の延長化によって漁獲量を維持しているのが現状で、将来の不安を訴える漁業者も多い。

このような現状のもとに、レンコかご網漁業及び三角布(餌袋)に重りを付けた撤餌つり漁業等で成果を収めている野母崎町漁協(長崎県で最も沖合・沿岸のつり漁業で各種漁業技術が進んでいる漁協のひとつ)へ赴き技術の習得を行うことにした。

V, 参加者名

氏名	所属	備考
玉城 晃	糸満 漁業協同組合	
金城 弘	糸満 "	
崎浜 秀成	伊江 "	
石原 修	石川市 "	
名嘉 正明	伊平屋村 "	
宮里 清吉	八重山 "	
上原 清昌	糸満 "	オブザーバー
ほか7名		
金城 宏	沖縄県漁業者センター	引 卒 者
加治工 勲	沖縄県漁連購買課	"

VI, 視察概要

1. 視察地の概要

野母崎町漁業協同組合は長崎市内からバスで約1時間30分で行ける長崎半島の先端部に位置し、東南西の三面は海に囲まれ、西北は五島灘を隔てはるかに五島列島を望見し、海岸線は多くの入江を有し、天然の良港が形成されている。

野母崎町漁業協同組合は図Iに示すように漁協本所と二ヶ所の支所があって、地区内の漁業及び水産加工の状況は表Iのとおりで沿岸まき網漁業と中・小型一本つり漁業が中心である。

また、煮干し、丸干し、カラスミ等の水産製品の加工も盛んである。

組合員は833名（正組合員711名、准組合員122名）で、昭和57年度の主たる事業実績（取扱高）及び事業純利益は表Ⅱに示すように製氷冷凍事業（氷売価＝4,900円）のマイナスを除いた他の事業は黒字経営である。

野母崎町漁業協同組合は、昭和40年4月に町内にあった4漁協が合併し、長崎県有数の大型漁協として発展しており、町の人口10,002人（3,003世帯）に対する産業別就業者でも漁業と水産加工部門就業の比率はきわめて高く、まさに水産業の町である。

2. レンコかご網漁業

野母崎町漁業協同組合におけるレンコかご網は、フグを対象に竹枠の金網かごでつくられたフグかご網として他漁協を経て昭和44年に導入されてきたとのことである。竹枠は古くなるとフグの入りが悪くなるのでペンキ等を塗ったり、かごの大きさや入口の形など研究を重ね、昭和48年にオールステンレスの角かごに改良された。

フグかごは底延縄式で行なわれるので、かごを底に着けることによって底魚は何んでも入ることから、このフグかごを利用してレンコダイを対象に魚種の転換が昭和48年に行なわれた。

現在、20トン以上2隻、19トン型5隻の合計7隻によってレンコかご網漁業が営まれている。

ア. 操業期間

レンコダイを主としたかご網漁業は周年操業である。操業は通常、早朝に入れて1時間ほどで揚げる。80～100個のかごを投入するのに40分、揚げるのに2時間かかる。

1日に3～4回の操業である。

イ. 対象魚種

レンコダイ、ハタ類、その他底魚は殆んど入るとのことである。

ウ. 漁場

水深150～170メートルで、漁場は東支那海の大陸棚、尖閣列島まで進出している。

エ. 漁具

図Ⅱに示すとおり、浮子の浮標縄は14ミリメートル、幹縄も14ミリメートル、かごと幹縄を連結する枝縄は9ミリメートルで縄の材質はクレモナを使用している。漁船の大きさによって縄の大きさも変るようである。

漁法は底延縄式であるが底延縄漁業のように四ッ又の鎖で漁具を固定しないで、浮標縄の重りは丸形の石（10～15kg）を両方に付け、縄を浮さないように所々に2～3個の石を付け海底をうように潮流に流す。いわゆる糸満地域で波及している深海立延縄漁業（ウキペー）の漁法と似ている。変るのはつりで獲るのとかごでとるのとの違いである。

オ. 経営

レンコかご網漁業を営んでいる19トン～20トン以上7隻の年間平均水揚額は4千万円～5千万円とのことでした。沖縄を水揚、補給基地としている19トン型（7～8人乗組）のレ

ソコカゴ網漁船の1航海当りの水揚げは10~15kg入れ木箱の350~400箱、額にして350万円~400万円、多いときには500万円の水揚げがあるとのことでした。

航海日数は那覇の泊漁港から出漁して約12日で入港する。水揚げした魚は鮮魚出荷業者に委託し、魚の入っている木箱のままコンテナ(航空貨物用)に詰め、宮崎・鹿児島・福岡・大阪方面に出荷している。

3. 撤餌(かぶし)つり漁業

野母崎町漁業協同組合におけるまき餌による一本つり漁業の歴史は古く、50トンクラスの沖合一本つり漁船15隻の取扱高は425,390千円となっている。

ア、操業時期

1月~12月(周年)

イ、対象魚種

タイ、マチ類、カンパチ、アラ類

ウ、漁場

漁場は図Ⅲに示す水深120~180メートルで海底が岩礁のところ

エ、漁具・漁法

かぶしつりのまき餌布の仕立て方は図Ⅳに示すとおり、まき餌を包む構造がひし形の布の中に重りの役目となる1~1.5kgの三角鉛をつけ、鉛の真中の穴から枝糸を通し、つり針を結ぶ。つり元は魚が喰い付いたら簡単に切れない様に約3センチの赤いめん糸を付け、枝糸と取りはずし出来るようにしてある。

操業方法は、早朝に漁場に到着し、魚探で魚群を確認してから、その場所の潮上に錨を入れる。「まき餌」投入の準備をして、枝糸を親指と小指に∞字型にかけて枝糸をまとめ、あらかじめまき餌を餌布に少し入れ、∞字型にした枝糸をおし込み、さらに、まき餌を充分に入れて、まき餌布の上部にあるスラセで結び海中に投下する。海底より約15メートル位のところでセキヤマ(幹縄)にショック(しゃくる)を与えると袋が開くようになる。

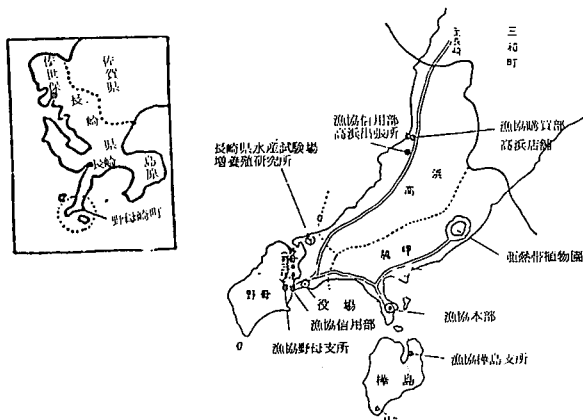


図-1 野母崎町漁業協同組合位置図

表一：地区内の漁業及び水産加工の状況（野母崎町漁協の概況より）

1. 漁業

漁業種類	隻数	規模(トン)	漁獲高	主な魚種	漁期	漁場	乗組員
中型まき網	6	4~19	1,555,800	いわし・あじ・さば	周年	西彼沿岸	30~35人
大目流し網	1	40~70	77,366	かじき・まぐろ	"	南、東支那海・三陸沖	7~8
沖合一本つり	15	10~50	425,390	たい・たかば・赤ばな	"	南、東支那海・五島沖台	4~7
沿岸"	152	2~5	257,728	たい・あじ・いか	"	野母崎沿岸	1~3
いせえび等刺網	73	1~5	94,839	いせえび・雑魚	8~9月	地先共同漁場	1~2
小型定置網	12	2~5	63,723	ぶり・水いか・雑魚・たら	周年	"	3~10
しいらづけ	10	7~15	174,023	しいら	5~10月	野母崎西方漁場	3~6
魚類養殖	5	3~5	79,514	たい・はまち	周年	区画漁場	2~4
藻類	75	—	43,951	あわび・うに・わかめ	3~9月	地先共同漁場	1
小型底びき網	19	3~5	75,416	車えび・雑魚	周年	橋湾	1~2
すくい網	14	2~9	38,465	小いわし・きびなご	11~6月	地先共同漁場	4~6
たこつば	15	2~5	51,951	たこ	4~9月	"	1~2
遊漁船	19	2~5	34,997	雑魚(客つり)	周年	野母崎沿岸	1
その他			18,608	その他雑魚			
計	416		2,991,771				

2. 水産加工業

種類	経営体数	施設及び規模	主な原料	従業員
煮干・珍味	38	釜釜・ホイスト・乾燥機2~3台・冷蔵庫はか 日産100~300箱(生産高1,119,550千円)	いわし・あじ・さば・むろ	6~10人
かまぼこ	6	冷蔵庫・ミンチ・魚肉取機・真空包装機	たら・雑魚・あじ・すりみ	4~8

表-2：事業実績（取扱高）及び損益計算書（昭和57年度野母崎町漁協事業報告書より）

1. 主たる事業（取扱高）実績

貯金残高	貸付金残高	購買	販売	購買	販売	砕氷・冷凍	漁業自営	利 用	製氷冷凍工場
3,999,558	3,246,682	- 660,589	4,154,273	33,491	61,589	8,170	211,890		

単位 = 千円

2. 損益計算書

区 分	総 合 計	事 業 別							
		信 用	購 売	販 売	販 売	製氷冷凍	自 営	遊漁対策	利 用
事業収益合計	1,340,153,998	413,389,336	663,528,902	114,106,064	33,490,905	61,589,204	23,983,346	8,170,275	21,895,966
事業直接事合計	1,039,790,141	303,173,594	620,407,079	16,972,560	36,070,858	45,281,355	5,983,346	3,644,543	8,256,806
事業総利益	300,363,857								
事業管理費合計	235,726,721	85,539,622	42,065,714	64,265,430		6,970,589	7,868,842	15,377,364	13,639,160
事業利益	64,637,136								
財務収支	△ 16,099,879								
事業純利益	48,537,257								
その他収益合計	112,184,399								
その他費用合計	138,646,956								
当期利益金	22,074,700								
特別会計純益	2,136,492								
当期純利益	24,211,192								

単位 = 円

図-2：レンゴかご網漁具図

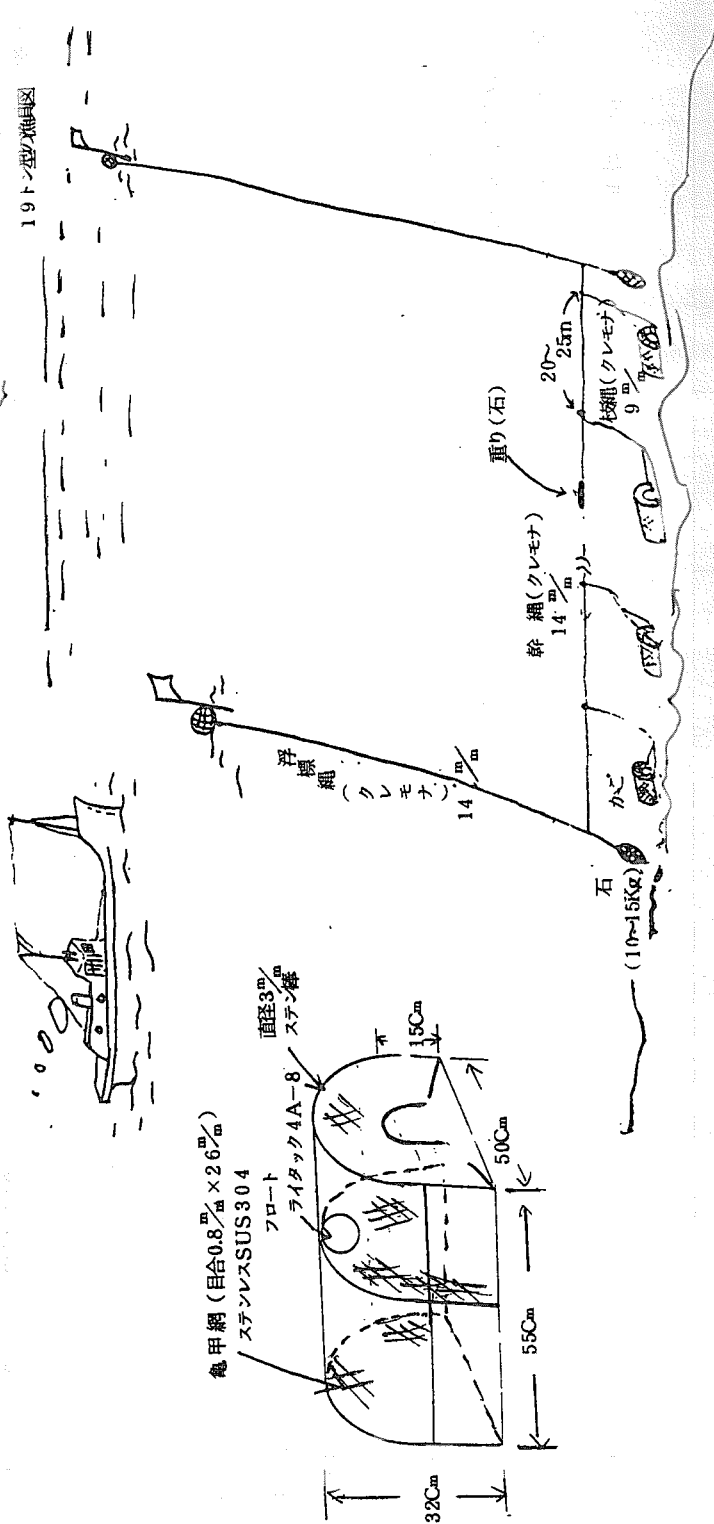


図-3：撒餌（かぶし）つり漁場図

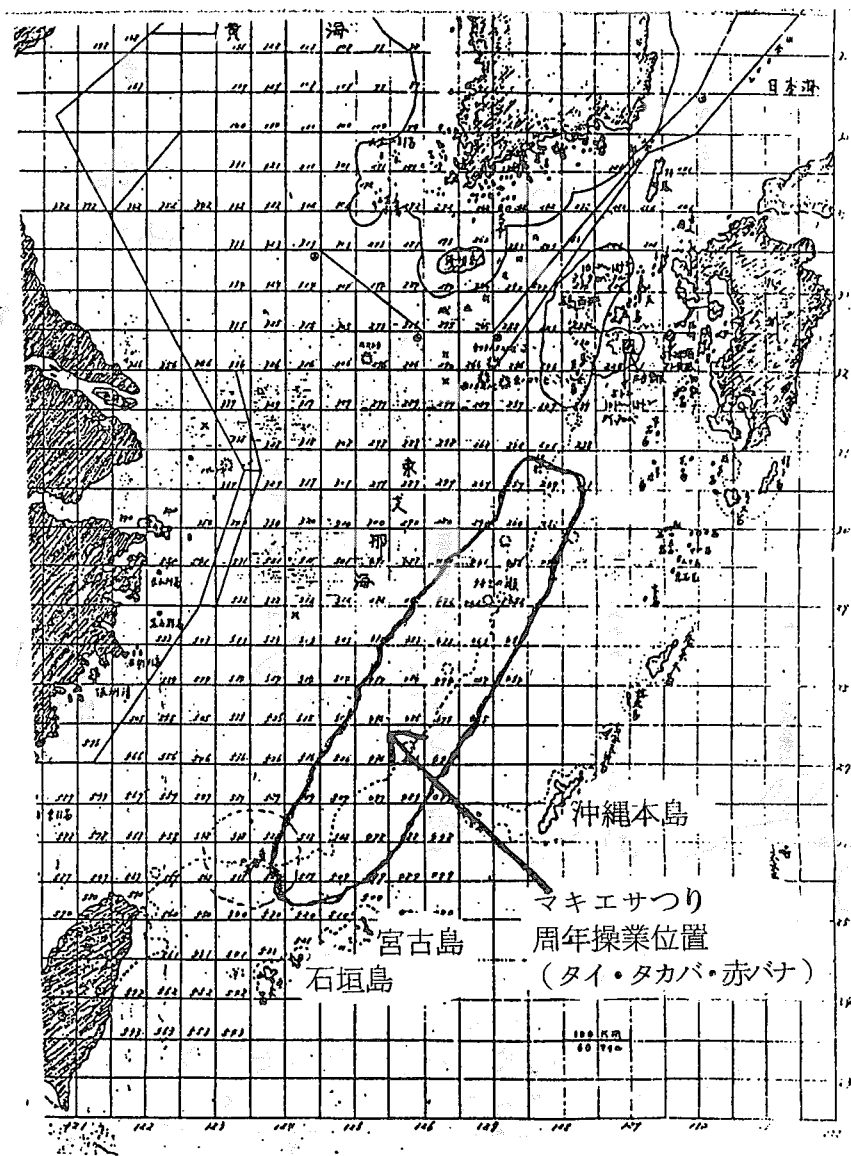
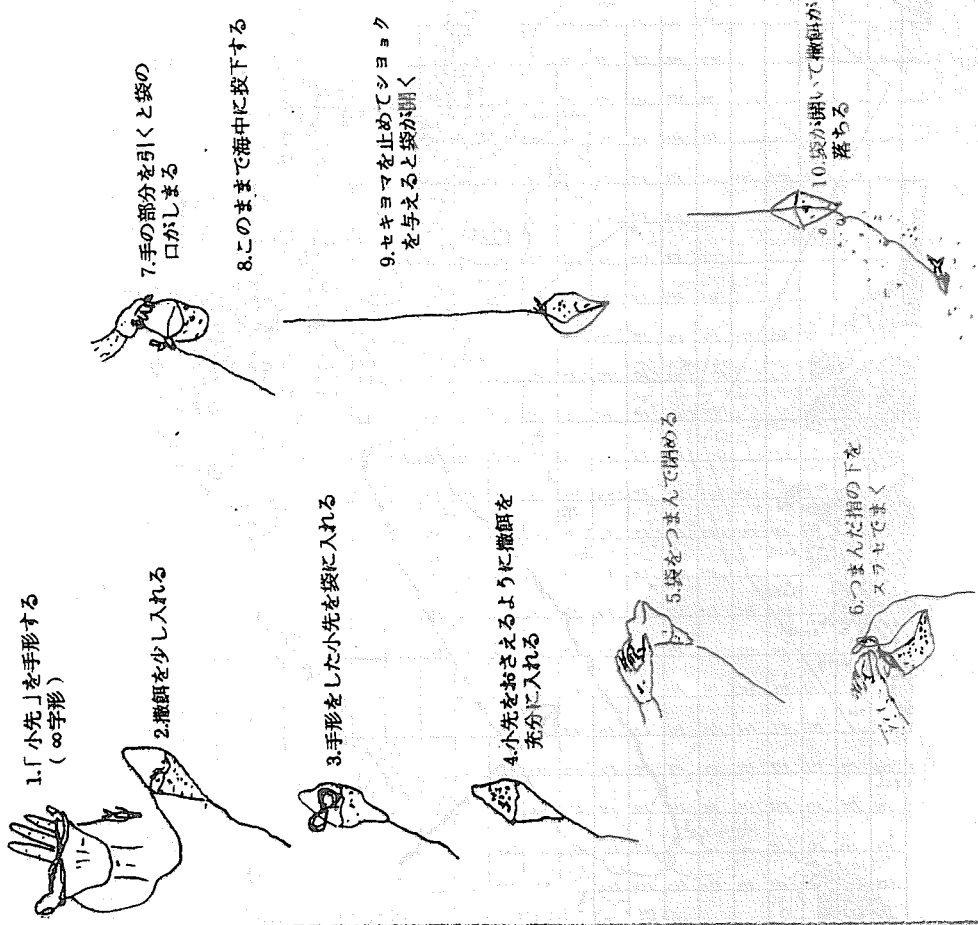
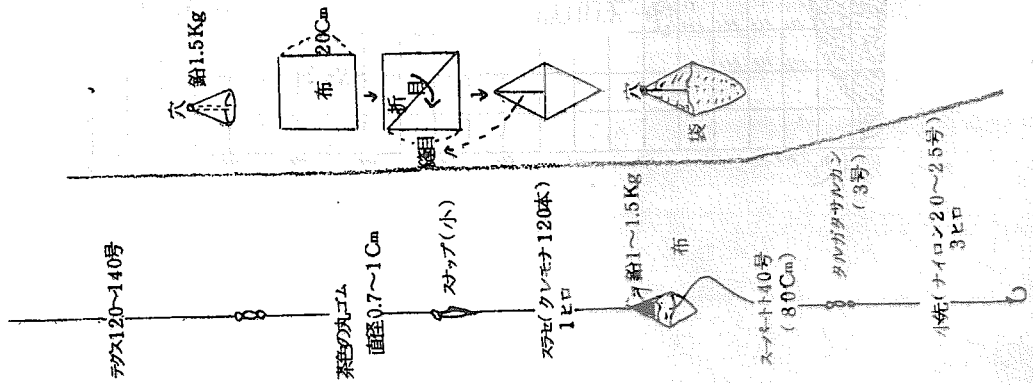


図-4：撒餌（かぶし）つり漁具図



引卒者 金城 宏（沖縄県漁業者センター水産改良普及員）

復帰後、漁具・漁法の導入、改良など漁業生産をめぐる環境は大きく変化し、つり漁場である
曾根資源にも先細りの恐れがでてきており、一本つり、底延縄、立延縄等の経営内容は苦しい状
況におかれていると聞いている。このような状況のなかで、新しい漁業の転換を進めるために、
今回の研修で得たレンコダイを対象としたかご網を導入し、漁場、魚種の開拓を図る必要がある。

その漁場は、本県から近く、10トン前後のつり漁船でも操業は可能であると思われる。その点
において、本県は有望な漁場を近くにひかえながら、情報化時代といわれる昨今、その漁場を活
用出来ずに他県より遅れをとったといえる。

また、2～3トンの小型漁船でも、既存の漁場でのレンコダイ及びその他の底魚もこのかご網
で漁獲が期待出来ると思われる。

今後は、こういった新しい開拓とよせて、水産物流通にしても、東京、大阪、福岡、鹿児島な
どの大市場に向けて積極的な出荷対策を講ずるべきである。

それと、一本つり漁業としての撤餌つり漁具も有望であるので、レンコかご網と合わせ、普及
課題として漁業者の協力を得ながら早急に実証試験を実施したい。

最後に、今回の研修の機会を与えて下さいました沖縄県漁業振興基金に対し、研修者一同を代
表して感謝を申し上げます。